

生涯教育専攻 平成19年度卒業論文要旨

青谷 達也

「若者とケータイ」

ケータイの登場によって以前と比べてコミュニケーションが楽になった。しかし、それが人間関係を希薄化させたと言われている。なかでも若者の人間関係は広く浅いと言われることが多い。

しかし、独自に行ったアンケート調査や先行研究などからも若者の人間関係が希薄化しているというような結果は得られなかった。たしかにケータイの普及によって人間関係は拡大したようであるが、それを希薄化と考えるのではなく多様化と捉えるほうが適切であると思う。以前のように深く狭い人間関係は失われてはいないのである。

若者にとってケータイは単なるコミュニケーション・ツールではなく、インターネット接続やカメラ機能などの様々な機能を備えたマルチなツールでもある。また、着信音やストラップなどによって自分らしさを表現する役割も担っているようである。いわばケータイはファッションの一部であり、自分のステータスにもなっている。ケータイとは自分の分身のようなものなのかもしれない。

(指導担当 石飛)

石塚 萌美

「映画『学校』にみる夜間中学校の研究」

山田洋次監督作品である映画『学校』は、幅広い年代の人々が生徒として集まる夜間中学校を舞台に、挫折や苦境から立ち上がる人々を描いたものである。山田洋次の念願の企画としてタイトルだけでは知られていたものだ。それが、90年代に入り、シリーズ化までなされた。

作品映画『学校』に焦点をあて、なぜ山田洋次は夜間中学校を舞台として取り上げたのか、人々はこの映画を通して何をみたのかということを考察してみた。

結果、山田洋次は夜間中学校こそ理想の「学校」であり、学ぶことの素晴らしさが実感できる場所であると考えた事がわかる。そのため、夜間中学校を舞台とした作品を描くことで、理想の教育について考える、きっかけを与えてくれている。

この映画は、教育の理想像や問題点を提示しており、私たちが今後の教育のあり方を真剣に討議する際に、有益なヒントを数多く提示してくれるのではないだろうかと思われる。

(指導担当 岡田)

石前 実

「天理教少年会活動における鼓笛活動の現状と展望」

本研究は、天理教少年会活動における鼓笛活動の実態を調査し、活動本来の目的に沿った活動ができていのかを明らかにすることを目的とした。また、鼓笛活動が持つ「にをいがけ」についても考察し、最後には今後の展望を明示した。

鼓笛隊数は年々増加しているが、1隊あたりの隊員数は減少し、またスタッフ不足の実態も浮かび上がった。活動内容は、活動の意義である「鳴物練習」への意識の低さも浮き彫りとなり、まだ活動の成果が現れたとは言えない。教外での活動は、アンケート調査を行った隊の約半数が「地域の行事」を中心に活動を行っている。また隊員数の約3割が未信者子弟であり、鼓笛活動は「にをいがけ」にも大きな役割を持つようになった。

展望は、自由記述にもあったように鼓笛隊間のネットワーク形成が必要だということと、保護者への理解という、横のつながりが望まれる。そして、少年会員を終えた者をスタッフとして導き、彼らを中心とした活動の展開が活動内容を充実させ、活動が継続すると考える。

最後に、育成者自身の信仰姿勢こそが、活動発展の基であることを認識しなければならない。

(指導担当 今西)

小栗 周次郎

「天理教の教会の考現学」

天理教の教会活動としての『神名流し』を通して、現在の教会の活動、あり方を考察した。天理教における布教・にをいがけとは、教祖に命を救けて頂いた者が、そのお礼にどうしたら良いか伺ったところ、「人を救けるのやで。」と仰せられたところに始まる。神名を声高らかに唱えるということは、まず神様をお呼びすることである。そして、神様をお呼びするからには「自分はこれから人様を救けます」と神様に決心することになるのである。そのため、信者自身、人々に救かって頂くために自分自身を成長させることになる。

千葉県のある信者さんは神名流しを6年間続けた結果、自分に対して拝をして通られるご年配の方がリュウマチを治るというご守護を頂いた。こういうような方々が教会に集まり、お礼として、にをいがけに出ることによって、教会はより人が救かる場所になるのである。

(指導担当 岡田)

川瀬 豪仁

「相撲競技人口の衰退について」

相撲というものは日本の国技であり、各地域において小さい頃から相撲にふれる環境は整っている様に思う。それが、なぜこうも低迷をしていくのかを歴史的な部分や世界的な観点から改めて考えてみた。

歴史的な部分を紐解く中で、古くからの歴史や習わしがあることなど、他のスポーツとは少し違った異世界のような空間があるというだけで、相撲人口が減り、面白さを失いそれに伴いファンも減ってという事が、現在の相撲人気の低調につながっているのではないかと思われる。改善点を挙げるとすれば世間の誤解や偏見を取り去ることや、国技である相撲を誰にでも触れることの出来るような場をもっと作ることを進めていくが大切であると考える。

古きよき歴史というものも相撲にはたくさんあり、それらを次の時代にそのまま受け継いでいけば良いのであるが、だからといって過去の歴史にこだわりすぎて現代の相撲の人気を下げていってはいけないと思う。

(指導担当 今西)

倉 拓也

「車椅子バスケットボールについての研究」

わが国における障害者スポーツの歴史は、障害者施策による行政主導の下、障害者の自立促進、及びリハビリテーションの推進を目的に進められてきた。また、1960年に初めて日本で車椅子バスケットボールが紹介されて以来、同競技の選手や関係者によって全国への普及を精力的に行った結果、現在の車椅子バスケットボールの登録チームは男子 82 チーム 746 人、女子 7 チーム 70 人で年に一回選手権大会が開催されるまでになっている。

障害者スポーツには経済的、物的環境的、人的環境的にスポーツを阻害する要因があり、これらの問題を早急に解決しなければならない。また、障害者スポーツも、健常者が行うものと全く変わらないもので、「いつでも、どこでも、だれでも」の言葉のように、生涯スポーツとして、これからもっと社会に浸透させていかなければならない。また、そのような環境を整えることが必要なのである。

(指導担当 石飛)

小松原 やよい

「学校給食における食育指導～奈良県の小学校を事例として～」

現在、わが国の食を巡る問題が危機的状況に至っており、国民一人ひとりが正しい食のあり方を学ぶ事が必要とされている。

そこで、本研究では奈良県の小学校を対象とした「学校給食」に着目し、実際に現場でどのような食育指導が行われているのかを調査した。その結果、現代の学校給食は、週に3回の米飯給食や地場地産の食材を使ったおかず、また世界の料理や日本の郷土料理など、献立を通しての食育指導が行われていることが分かった。しかし、献立に工夫を凝らして、普段家庭で食べないようなメニューを取り入れても、最終的に残してしまう児童が多く、児童への食残しによる指導には苦労しているように思えた。今後は、学校だけでなく家庭との連携を図っての食育指導を通して、児童へ「食の大切さ」への理解を深めるよう努力する事が望まれるのではないだろうか。

(指導担当 岡田)

齋藤 聡史

「アスリートの自己調整学習」

この卒業論文では天理大学バドミントン部員を対象に自己調整学習の実態、自己調整学習と競技能力の関連を調べる。自己調整学習とは、学習者自身が学習の過程を積極的に調整していくことや自分の状況に応じて練習の仕方を変化させることであり、天理大学バドミントン部では、キャプテンもプレーヤーであるため、部員の個人個人の課題にそった練習を組み立てることは難しく、自分自身で練習を調整していくことが大事であると考えたからである。

研究前の予想ではクラブ内の競技力の高い人ほど自己調整学習能力に優れているというものだった。しかし、今回の研究で自己調整学習の違いが見られたのは、男女と学年によるものだった。特に学年による違いには3回生までと4回生に差があるように思われる。これは、3回生で幹部学年となりクラブ運営を経験していくことで自己調整学習能力が養われており、幹部学年を経験しているかどうか3回生と4回生の差となっていると考えた。天理大学バドミントン部において自己調整学習能力を最も養えるのは幹部学年となってクラブを運営していく1年間だといえるのではないだろうか。

(指導担当 岡田)

阪本 紘子

「父親支援の視点に立った子育て学習プログラムの開発研究」

本研究は、家庭教育としての子育て支援研究の一環として、父親がどのような関わり方で育児に参加することが望ましいかを、生涯学習支援の視点から取り上げたものであり、父親の学習活動のあり方や進め方について研究することを目的としている。

一般的に、父親は子育てに積極的に参加していないのではないかという仮説を立て、調査研究に取り組んだ結果、父親は予想以上に積極的に子育てに参加していることが判明した。こうした父親の家庭での行動に対して、高評価を示している母親が多いこともわかった。今後は、父親を対象の育児サークルも増えることが予想される。育児サークルに参加した父親が、周りの父親を誘うことが最も参加者が増える方法であると考えられる。育児サークルの場に父親が積極的に出向き、父親同士のネットワーク形成を図ることが、今後の子育ての最重要課題であるといえよう。

(指導担当 今西)

佐藤 年彦

「パチンコ参加人口減少に関する考察」

本稿ではパチンコ参加人口減少の原因を解明し、パチンコ参加人口減少を食い止めるための方策を今後のパチンコ業界に提起することを研究目的としている。

第一章ではパチンコ産業繁栄の歴史と実態について説明している。また、なぜパチンコが大衆娯楽として支持されているかについて還元率が高く参加者が最も勝ちやすかったことを要因としている。第二章では先行研究の分析をしている。先行研究では参加人口減少の原因は「パチンコメーカーの寡占」によりパチンコ店の過当競争が起こり遊戯金額が増加したためとあるが、市場規模と販売台数からの分析によって参加人口減少の原因は「パチンコメーカーの寡占」ではないとなっている。第三章では参加人口減少の原因は過当競争により、パチンコ店の経営が圧迫され、射幸性の強い客単価の高い遊戯台が増加したため遊戯金額が増加したと主張している。また、パチンコに関する世論・有識者調査からの分析によってパチンコ参加をやめた人の最大の理由は遊戯金額の増加にあるとわかった。第四章では平成8年の自主規制により射幸性の高いパチンコ機を撤去した影響で参加人口が減少した。これによりパチンコ店の過当競争が始まり、それによって遊戯金額が増加し、参加人口が減少しているという結論に達した。

また、パチンコに関する世論・有識者調査から参加者が今後のパチンコ台に望まれるものは少ない遊戯金額で長時間遊べる台とわかった。以上のことから本稿ではパチンコ参加人口減少の原因である遊戯金額増加を解決するためにパチンコ店の「低貸玉営業」を提言している。

(指導教員 石飛)

田辺 百合子

「食育の可能性と大学生の食問題」

ライフスタイルや価値観が多様化・高度化したことに伴い、私たちにとって大切な食をめぐる環境が大きく変化し、人々の食に対する関心が希薄になってきたことで、近年様々な問題が浮き彫りとなってきている。

そこでキーワードに取り上げたのが、この「食育」である。2005年には食育基本法が施行され、生涯にわたり健康で豊かな人間性を育み、健全な食生活を送るための取り組みを推進することを目指している。まずは、現代人が抱える食生活の問題点に着目し、食育とはどのような取り組みであるのか、なぜ今、国をあげて食育を必要としているのかを考察していく。さらに、大学生という年代だからこそ、軽視されがちな食に対する意識改革を図る必要があると考える。天理大学生を対象に行った食育に関するアンケート調査をもとに、注目すべき大学生の食育事情を捉えながら、今後求められる食育のあり方について論じていく。

(指導教員 井戸)

中川 聡子

「ペットブーム～その光と影～」

昨今の風潮とも言える「ペットブーム」。『癒し』＝「ペット」と表されるほど、人はペットに癒しを与えられている。人々の生活の中に深く浸透してきているペット、飼われているペットの数が増加していることから、現在ペットに関連する商品や企業などが人の手によって多く作られ、人とペットがより共存しやすい環境が出来上がっている。

ペットブームについて、多くはそのような「光」の部分が表に出されているが、実際には光があれば影もあり、「ブーム」によって生み出された「影」の部分も存在している。溢れかえったペットの数、心無い飼い主によって寿命を全うできないペットたちも多く存在する。

「ブーム」とは我々人間が作り出すものであり、「ペットブーム」とは「いのち」のブームを人が作り出したこととなる。人の手で「いのち」のブームを作り出したからこそ、「いのち」をブーム化してしまったからこそ、人は影の部分に目を向けるべきではないのか、という思いから「ペットブーム」を研究課題とした。

第一章ではペットの起源・歴史、人のペットに対する意識の変化、第二章・第三章では光の部分に当たる、人がペットと触れ合うことによって得られる効果、人とペットを取り巻く環境の変化・企業の発展について述べ、第四章では私がもっとも大きく取り上げたかった「影」の部分について、ペットたちが犠牲となっている実態、保健所や動物管理事務所など現場へのインタビューも行い述べている。

(担当教員 井戸)

中村 綾

「特別支援教育における地域連携の取り組み

発達資産の視点から見た障害児(者)教育に関する一考察」

本研究は、大学院へ進学して「障害児(者)の社会参加・就労を促進するための特別支援教育とNPO法人団体による支援活動に関わる研究」を進めていくためのステップとして、特別支援教育についての知識や理解を深め、特別支援教育における障害児の発達資産獲得について研究したものである。

奈良県内にある2校の養護学校を対象にして、実際の学校現場を見せていただいたり、また先生方にも直接お話を聞かせていただいたりして調査・研究を進めた。

その結果、やはり学校の中だけではなく地域社会と連携した取り組みによって、子どもたちの社会的な経験を豊富にしていくとともに、そこから内的な資産の獲得すること、またそれを取り巻く環境、外的な資産についてもその力を向上させていくことが重要であると言える。今後は、学校・家庭・地域が「連携」「協働」し、それぞれ一人一人にあった教育支援システムを構築していくとともに、それぞれが教育的役割をどのように果たしていくかが大きな課題となるだろう。

(指導教員：石飛)

中森亜紀子

「ホスピタリティに関する一考察～日本旅館の女将から考える～」

モノが溢れる現代の日本社会の中で、今や人々の欲求は千差万別になり、質の高い付加価値が求められるようになった。21世紀は「心の時代」とも言われ、「ホスピタリティ」に対する注目も集まっている。ホスピタリティとは、招待客、訪問客、見知らぬ人々をモノ惜しみない態度で迎え入れ、もてなすことであり、互いに認め合い、助け合う精神で、これは自然との共生や思いやり社会の実現への一歩である。このホスピタリティを実践する上で、モノ・コト・ヒトの三つの要素の存在が挙げられるが、その中でも特にヒトの存在が注目されている。

そこで、本論では日本らしいホスピタリティ提供の場であると考えられる、日本旅館について取り上げ、その中でも特に女将に焦点を当てて、そこから今求められているホスピタリティの在り方を探求してみた。女将の語りのなかからホスピタリティについて考察していくなかで、あらゆるものが進化しても、その原点を見直し、らしさを守り続けていくことが大切であると読みとれた。それが「心の時代」と言われる現代に生きる人々の求めるものであると感じた。

(指導教員：岡田)

松浦もと佳

「音感教育を推進する学習機会に関わる考察」

本研究は、「音感教育」のプログラムをふまえて、「音感」を身につける側への学習機会の提供とそのための情報提供において発生する諸問題を克服するための方策について、生涯教育の視点から研究することを目的とした。

一般的に「音感」は「絶対音感」と「相対音感」に分けられ、本研究での「音感」は「相対音感」を主として述べている。

現在音楽に関わっている人を対象にアンケートを行なった結果、「音感を身につけたい」と思っている人の中で「音感を見に付ける方法を知っている」人があまりにも少なかった。このことから、「音感」に対する学習の情報提供が不足しているのではと考え「学校教育での指導方法の見直し」「地域密着型の派遣指導者による音楽教育」といった解決案を新提言として述べている。

情報提供をする側がもっと「音感」という視点に立つことで、この問題は改善の一途をたどることができるのだろう。

(指導教員：今西)

的田将裕

「総合型地域スポーツクラブに関する一考察」

現在、日本の社会がかかえている様々な問題やシステムによって人々の生涯学習スポーツの機会が十分に保障されていない状態であり、このままの状況では諸問題が解決することは難しいと感じる。そこで、問題を解決できる可能性を持った「総合型地域スポーツクラブ」という新しいシステムの中で、新しい実践を作り上げていくことが必要になってきていると思い、研究することとした。しかし、活動スタートから10年以上経過しているが、クラブの数は思うように増えておらず、また、成功しているクラブと成功していないクラブの差が激しいのが現状である。そこには数々の課題があるといえる。そして、こうした課題を解決するための一つの方策として、スポーツ産業の「産」、行政の「官」、学校関連の「学」、地域住民の「民」が中心となった、総合型地域スポーツクラブを支える産官学民によるネットワーク作りが必要であるといえる。

(指導教員：岡田)

矢野愛海

「障害者の『性』に関するコンフリクト」

本研究は、障害者の「性」に関する問題をピックアップし、今後の障害者の在り方について考える事を目的とした。

現在の日本の現状を見てみると、まだまだ障害者の「性」はタブー視されているように感じる。障害者に対して、子どもをつくることはおろか、セックスも禁止しているという現状がある。特に知的障害者の「性」については「寝た子を起こすな」と言われ、「性」の教育もあまり積極的に行われていない。そこで、なぜこのような問題が発生するのか、その現状と問題点を調査することにした。主に「性」に関する偏見や誤解から始まり、当事者本人の葛藤や家族の葛藤、周囲の葛藤が浮き彫りとなった。これらの問題は、当事者本人や知的障害者に関わる者だけでは決して解決出来ない。当事者本人とその家族が問題に対して肯定的に考えていくことによって身近な人々に理解してもらい、社会全体が理解・協力していくことが障害者理解につながるのではないかと考える。

(指導教員：今西)

山下雅人

「高校野球の特徴と課題」

「高校野球」とは、全国の約4000校以上の学校が甲子園、あるいは甲子園優勝を目指して日々練習を重ね、また、全国の野球ファンに愛されているスポーツである。自分もその1人だった。選手や監督が満足の出来る野球をするために全力で野球をする姿が好きだった。

しかし、高校を卒業してから、その純粋な野球が違って見えた。開会式が長く、話題の選手しか記事にならない報道...そんな疑問を抱いてるうちに、様々な問題点や課題が浮上した。

学校内における現状は、教育の一環である部活動が社会的イベントになっているため特別扱いになっていたり、選手の体の負担や髪型の強制である。

学校内だけではない。主催側の現状では、どんな不祥事が起きててもさわやかなイメージを損なわないための報道や、野球以外の理由で選出する「21世紀枠」などがある。

地域でも、各県によって学校の数が違うので出場の確率にズレがある。いろんな策はあるのだが、実行するのが難しい現状にある。

野球をするのは選手自身である。特待生問題も大きくなって野球が出来ない選手がたくさん出てきた。選手は何も悪くはない。純粋に野球を楽しめる、そんな高校野球に進化して欲しいと願っている。

(指導教員：井戸)

池崎 未幸

「天理教における鼓笛活動の意義とその役割 インタビュー調査をもとに」

本論文では、天理教における鼓笛活動の意義・役割を明らかにするという問題意識から、インタビュー・アンケート調査をもとに研究を進め、一般の鼓笛隊ではなく、天理教という宗教の中に存在する鼓笛隊がどのような意味を持ち、どのような役割を果たしているのかを明らかにしていった。

第一章において天理教における鼓笛隊について述べ、鼓笛活動の歴史を辿り、本来の活動目的を述べた。第二章のなかで、実際に活動を行っている方を対象に実施したインタビュー・アンケート調査の結果、また鼓笛隊が実際に行っている活動模様を示した。そして第三章で、調査結果をもとに実際の天理教における鼓笛活動の意義、果たす役割を考察することにより、鼓笛活動は子どもを育てる場であり、またそれと同時に子どもと大人の相互成長の場であるということ、そして信仰面においては、信仰心を養う場として大きな役割をはたしていることなど、いくつかの重要な要素を見つけだすことができた。

(指導教員：石飛)